

2章 自立するためにはどう学ぶか

1 旗たてて一番前を行く人は誰？

◆あらゆるチャンスから学ぶ

「お前ら、そこに並んでいろ！ 班長、皆をまとめて並ばせておけ！」

大声で叫び、汗をかきながら四、五人の先生らしき男性達が、ターンテーブルの上に運ばれてくる大きなスーツケースのタグを一つひとつチェックし、荷物を降ろしている。その脇で、有名進学高校の制服を着た百名位の高校生達が、班長と思しき生徒を中心に十名位のグループに分かれて、自分達は手を下さずボケッと、荷物を降ろす先生達を見つめている。

同じ場所で学園の子供達が、同じターンテーブルの上に運ばれてくる自分達の荷物をチェックし、他の学生の荷物や私達の荷物も含めて一緒に降ろそうとタグを確認しあっている。これは、イタリアの飛行場での光景である。

子供は本来どんな状況にも遅^{たぐま}しく順応^{じゅんのう}していける力を備^{そな}えている。でも、多くの場合、

大人達がこういった力を發揮させず、そいでしまつてゐる。

世間的にはエリートの卵だと考えられている彼らにどうして？ 子供達がノソノソやるのを待つている時間が無駄だから？ 何をするよりも勉強優先だから、何もさせないの？ これも学べる機会じゃないの？ という思いがしばらく頭を離れなかつた。

子供が社会に出る前に、「学ぶことは教室を離れても終わらない」と気付かせて欲しいのだが。

◆修学旅行は誰のもの？

修学旅行は読んで字のごとく、学び修める旅行だろう。実際に、教科書で読んだり見たりした实物を見る事ができる。日本中が貧しく、旅行など行かれなかつた時代、「高校の修学旅行で行つたことがある」という懐かしい思い出さえ生みだした。

それが今は誰でも簡単に旅行をし、教科書の中で読んだり見たりした实物もすでに見ていることが多い。だから、現在の修学旅行に出かける意義は、昔の修学旅行のそれとはまた違つてきてゐるはず。

しかし、現代の修学旅行、それも海外の修学旅行は単に、学校の生徒募集に使うための広告塔でしかないように見えるが、それは私だけの誤解だろうか。

それではもつたいない。本当にもつたいない。子供達が大きく学べる場を簡単に潰してしまっているから。

学園の修学旅行、特に海外に出かける場合、まず自分の苦手意識や自分が受け入れてもらえない体験をさせてみる。旅行先では未経験の物事から簡単に逃げ出しかねない子供達に、逃げ出す場所が与えられない。逃げ出せなければ、自分で考え、解決するしか方法がない。そうやって自然に彼らが逞しくなる機会^{チャンス}を与える。

海外はそう簡単に帰れない。もし仮に、一人で飛行機を使って日本に逃げ帰りたいとしても、それだけでもすごい自力を使わなければならないから、ある意味意図に適う。

「親から子供を離^{はな}す」。すなわち、支援者^{スポンサー}から子供達を引き離したところで、生き抜く力が育まれるのだと思う。

また、海外の旅で学んで欲しいことはお金の遣^{つか}い方だ。今の子供達は本当にお金の遣い方を知らない。お金を遣うべきところで遣わず、どうでもいいところで散財^{ざんざい}する。そのため、一定の額のなかで、工夫して効果的にお金を遣う方法を学ばせたいと思っている。これも、いくら口で説明してもやつてみないと身につかない。

さらに海外の旅は、危機管理^{ききかんり}の責任を含む自己責任と、他人への思いやりを持つ訓練の場だと思う。情報を集めたり、分析し、結論を出す実践訓練の場もある。

こう考えてみると普通の学校であれば、修学旅行は二〇〇二年度から導入される「総合的な学習の時間」の格好の材料として捉えられていいはずだ。

学園の学びのスタイルは、自分で疑問を持ち、情報を集め、分析し、結論を出す。それをまとめ、発表するのが基本形だ。そしてその力をどんな状況、どんな場面においても発揮^{はつき}できる人間になれば、どんな仕事の実務能力としても相当なものになる。それが生きていくうえで、一番役立つ基礎力になるとを考えている。

「勉強＝机の上のこと」と、小さいときから思い込まされ教育されて来た彼らに、「勉強とは机の上だけのことではない、毎日の生活の中にもある」と思い直させる良いチャンスだ。そして何より、「自分はすごい潜在能力を持つていて」「自分はけっこうやれるんじゃないか」という実感を肌でえて、自信を持つようになるための重要な動機づけになる。

◆主役は生徒、脇役は先生

学園の修学旅行を紹介しよう。もちろん主役は生徒達。そのため、脇役^{わきやく}の先生は最後まで主役を引き立たせるため、脇役に徹^{てつ}し、でしゃばらない。旗立てて先頭は歩かない。何から何まで主役の生徒に計画を立てさせ、実行させる。

行く先の選定^{せんてい}から、訪問先へのチケットをいかに安く手に入れるか、どの位の日程で行

動するのかをまず自分達で決める。そして、それぞれの担当者が情報を集め、各国の観光局や旅行会社に行き、資料を集め、本を読み、分析する。^{ぶんせき}そしてパスポート取得から、すべてのスケジュールが学生達の手で作られる。その間、脇役の教師は子供達に疑問を投げかけるような形で、最低限のアドバイスをする。その結果、分からなりにも、旅行行程を理解し、自分で管理できる最低限の荷物と、親にキッチンと交渉して出してもらった旅費^{りょひ}を持つて旅行がはじまる。

ここまでできたら、修学旅行へ行く意義の六〇%は完了^{かんりょう}である。

確かに、学校の先生達が旅行業者と一緒に立てたスケジュールと比べれば、初体験の学生達が立てたスケジュールなのでおおざつぱである。しかし完璧^{かんぺき}でないから、実生活のようなスケジュール変更や、思いがけない出来事を通して成長の余地^{よち}があり、子供達が見事に変身し、成長を遂げられるのだ。

ここで子供達に求められる力は、齋藤孝さんの言葉を借りて言えば「段取り力」になる。「段取り力とは、言葉を換えれば、場を作る力である。ホームパーティや飲み会、部活の合宿など、どれほどささやかなものであっても、そうした何人かがかかる場がうまくいくかどうかは、それをとりしきる人間の段取り力にかかっている。参加している人間はその場を楽しく動ければいいわけだが、段取りをする人間は、事前に状況をシミュレーション

ンし、当日も展開を読みながら気を配つていく」

そして「杓子定規な捉え方しかできないというのでは、段取りを組むことはできない。全体を大づかみに把握したうえで、突発的な出来事でもプラスに転化して取り込む柔軟性が段取りには含まれる」

まさにこういった力を培う実地訓練として旅行を機能させようとしてきた。

行く先々でその国担当の学生が、時間はかかるても何とかいろんなところに引率して行く。レストランなどでも身振り手振りで交渉し、見事に責任を果たす姿は何とも逞しい。担当日一日目を無事終えたときの自信に満ちた顔は、大舞台を踏んだ主役の顔である。

脇役に徹する教師達も主役の喜びのオコボレを頂戴でき、その時の気持ちは「教師冥利につきる」のひと言だ。そして、引率された学生達も各自が次の日から、どこへでも単独行動にしていき、自由時間を満喫する。

子供達を取り巻く親や先生も含めた大人達に提案したい。経験不足だから危険に遭遇しないように、時間やお金を無駄にしないようになどと言いながら、旗立て、髪を振り乱しながら自分達の思う通りにならない学生達の先頭を歩くのは止めよう。

勉強の主役は学生である。先生も親も脇役である。脇役は脇役に徹し、主役がのびのびと学ぶチャンスをつぶさないようにしたいものだ。

2 豊かさの弊害

◆あなたの夢、なんですか？

父「早苗ちゃんは大きくなつたら、何になりたいの？」

私「ターザン！」

五歳年上の兄が友達と一緒に「あーあーあー」と叫びながら、有栖川公園の木々の間に
おサルさんのように^と飛びまわつて遊んでいた。それを見て、羨^{うらや}ましくて仕方がなかつた私は、
大きくなつたら絶対ターザンになりたいと、真剣に考えていた。三、四歳ころの私の
夢である。

「止めといたほうがいいよ。舞台^{ぶたい}に穴ぼこがあいたら、舞台がかわいそうじゃないか！」
と、すでにチヨット太めの小学校三年生の私に、あのふわふわした天使のような衣装^{いしょう}と、
爪先^{つまさ}で立つて踊ることを諦めさせた、兄の真剣な言葉。そう、小学校三年生の私の夢はバ
レリーナだつた。

家は楽しいのが当たり前。私は可愛がつてもらうのが当たり前、と信じて疑わなかつた私に、「世の中、楽しくない家が存在するんだ」と教えてくれたのは学級文庫の中の本。クラスの友達に知られないように、涙を拭き拭き読んだことを覚えている。その影響で「大人になつたら孤児院こじいんの先生になりたいんです」という夢を小学校卒業のときの文集に書いた。

あれから四〇年以上の歳月が過ぎた。

現在、五〇歳をすぎ、小学校卒業時の夢と遠くない仕事をしている自分がいる。しかし夢はまだまだいっぱいある。今の私の夢は、五年目の学園を完全に軌道きどうにのせること。授業の後、学生や先生達が集まる場所、例えばゆつくり暖炉だんろを囲んで火を見ながら、のんびりいろんな話ができるような場所、せめてゆつくり放課後を過ごせる大きな場所に引っ越したい。目をキラキラ輝かせた小さな子供達の「先生、これなあに?」「どうしてなの?」と好奇心いっぱいの質問が飛び交うような「学園ジュニア」をつくり、私のアイディア教材で、語学教育を世界中に普及させ、利益が出たらそれで、孤児院から養老院までの楽しい施設しせつをつくる。

庭つきの家に住めたら、庭の角にバーベキューができるような設備をそろえ、皆でゆっくり食事をしながら、ブランチをして楽しむ。庭の角に穴を掘つて、そこにバナナの皮で

包んだ肉を蒸し焼きにして、皆で食べられるようにしたい。できたら、庭に小川が流れていて、小川のそばに椅子^{いす}を出して、ゆっくり小川の音を聞きながら本を読んだり、アフタヌーンティーを楽しんだりしたい。「先生、泊^とまつていい？」と聞かれたら、「好きだけ、ゆっくりしていい」と言えるような余裕が持ちたい。五〇歳を過ぎた現在も夢は次々と湧いてくる。

しかし現代の子供達には夢がないという。夢のない子供達に大人達は愕然^{がくぜん}とし、子供達は「生きる目標が持てない夢のない時代に生まれた」と言う。

「夢ってなんだろうか？　夢がどうして持てないのだろうか？　そもそも『夢を持つ』つてどうして必要なことなのだろうか？」と、ずっと考えてきた。そして、フッと気がついた。夢って、満たされ過ぎていると持てないのかも知れない！

人間として生まれてきて、絶対誰にでも公平に与えられていると信じている真実が私にはある。それは、人間は「終わり」に向かって生きていく中で、一生のうちでしなければいけない苦労の数は同じだということ。違うのは苦労が小出しに来るのか、大出しに来るのか、平均して来るのかの違いと、苦労を苦労と感じるか、苦労を楽しいことの前兆^{ぜんちよう}と考えるのか、つまり考え方や捉え方の違ひだけだと。

そして、長い人生を飽きることなく、最後まで全うできるように、神様が下さった調味料が「楽しみ（樂し味み）」や「苦しみ（苦し味み）」で、それを上手に使うための目標が「夢」なのだと思う。その夢は、足りないものがあるから、こうしたい、ああしたい、というようを考え出すことから、自然に湧き出てくるのではないのだろうか。

◆夢を持つために何でも与えることをやめる

夢が「不足しているものを補いたい」という欲求から湧き出てくるものであるなら、親が自分の人生の不足を補おうとして湧き出てきた欲求を、子供に押し付けても仕方がない。隣の井戸に水が湧いても、自分の井戸に水が湧くかどうかは保証がないように、保証のないものにヤキモキするより、保証が持てる自分、すなわち親自身が自分の夢の実現に向けて努力するべきではないのか。そして、親が自分の夢の実現に向けて努力している姿を子供達に見せることは、どんなに有名な学校に行くことより、どんなにいい本を読むことより、子供達の人生にとつて大きな意義あるものになるはずだ。

それと同時に、子供が夢を持てるように、夢を持つ第一歩のトレーニングとして、子供が欲しがる前に与えたり、考える前に考えてあげるようなことをしてはいけない。実際、何の苦労もせず手に入れた物を大切にしている子供を私は見たことがない。本当に欲しく

て、何とか手に入れようと、アルバイトしたわけでも、親を説得したわけでもないので、手に入れたことへの感謝がない。学園の子供達でも、「どうして手に入れたものを大切にしないの？」と聞きたくなるほど、高価なギターでも何でも、そこら辺に放りだしてある。

夢がないことはつらいと思う。生きる楽しみがないのだから。あるのは、人生の「終わり」に向かって歩いているという事実だけだ。そうなつたら、生きることも大切にできないし、人も大切にしない。

極端に言えば、親からいただいた大切な自分の人生も簡単に捨てかねない。捨てた命は戻つてこない。そんな悲しい選択を子供達がしないよう、夢がたくさんある子供に育てるために、何でも与えてしまうことをやめよう！

「与える余裕があるから与える」という考え方を捨て、与える選択権を親は行使しよう！代わりに足りないものを、不足しているものを工夫して補う知恵を授けよう！

そして、どんな小さな夢でもいい。子供達が持った夢を大切に大切に育ててあげたいと思う。たとえ、親の目からみたら、「くだらない」「無理」と思えるような夢でも、長い人生、夢の実現に向けて人は変化をしていけるのだから。

◎参考

心の東京革命都民集会（平成12年10月）

石原東京都知事あいさつ より

やっぱり大脳のトレーニングというのは必要なんです。それはどういうことかというと、やっぱり頑張って物事をやるとか、うれしいとき本当に心から笑うとか、本当に悲しいときは、滂沱（ほうだ）と涙を流して悲しむと、そういう反応なんです。もっと大事なことは、人間が頑張って耐える、耐えたことで成功したらほっとする。あるいは本当に、一人でも晴れ晴れ笑う。そういう、人間の生活の活力を与える心の動き、情念の動きというものをびんびんと生き生きと促す、その脳幹が非常に衰弱している。

それはそうでしょう。「お母さん寒いよ」と言ったらすぐ暖房を入れてくれる。「暑いよ」と言ったらすぐ冷房が入る。昔は「おなかすいた」と言ったら「我慢なさい、もうじきご飯ですからちょっと我慢なさい」と言うけれども、今は子供が「おなかすいた」と言うとすぐカップラーメンとか何かを出す。

つまりもう簡単に欲望が満たされるから、我慢するという習慣が生活の中になくなってしまった。つまり、人間のトレランス、耐性、こらえ性というものがどんどんどんどんなくなってくるから、ある時点になると子供は突然キレて、もう見境がつかなくなって、とにかく人を刺したりする。これはやっぱりトレランス、耐性ですね。そういうものが非常に希薄になったという現象の証左です。

日ごろ余りに何でもかんでも与えて甘やかすことが実はいかに有害かということも悟り直して、この物のあふれた時代に、むしろ与えるものを抑制することも心がけることで、私は実は子供をごく真っ当な人間に初めて育てることができるんじゃないかという気がするんです。

3 無駄は人生の宝箱

◆無駄つて何？

身近に子供達に接していて気になることがある。それは、時間やお金の使い方が上手でないこと。また、口が達者な割に、コミュニケーションの取り方が下手なことだ。

彼らは一見損するよう見えることに対し、絶対手を出さない。何をするときでも「無駄か無駄でないか」、そんな基準でしか物事を判断しない。

これでは人間に幅がなくなる。生き方に魅力がなくなる。余裕がなくなる。

「無駄」という言葉の辞書的な意味はネガティブなニュアンスだが、この無駄を必要以上に嫌悪し、排除してきた過程で失ったものは大きい。

というのも無駄には本当の無駄と、一見無駄に見えるがゆくゆくは無駄にならない二種類の無駄があるからだ。子供達はまだ表面的に判断し、無駄を誤認してしまうこともある。だから本当に無駄か、無駄でないかを気付かせていくのは大人達だ。せめて、子供を取り

巻く大人達が、もう少しその辺りに気配り^{きくぱい}できると、子供の世界はずつと楽しく、豊かになると思う。

かつて日本には、高度な経済成長を達成するために、時間を逆算した上で組まれたスケジュールがあつた。一端組まれたスケジュールは、それを消化するために、消化を妨げると思われるすべての無駄を排除した。スケジュール進行に支障をきたすが、本当は必要と思われる無駄に対しても社会の目はつむられてきた。そして、そのような時代が終わつても、こうした構造は長く見直されることがなかつた。

こういつた無駄を省く社会の構造は、子供の視野を狭くし、自分から考えたり、判断したり、軌道修正^{きどう}したりする力を子供に持たせることを阻ん^{はば}できた。

しかし社会で構造改革の必要が叫ばれ出したのと同時に、「少年犯罪」や「不登校」「心身障害」「幼児虐待」など、次々と従来式のやり方の問題が表面化し、今やつと世の中は変わろうとし始めている。しかし、それでも既得権益^{きとくけんえき}を持ち、染み付いた考え方から抜け出そうとしない人々も大勢^{おおぜい}いる。

そもそも現代では「無駄な時間、無駄なお金、無駄な人付き合い」というものは、何を判断基準として決めてきたのだろうか。

◆たつた三〇分の効果的な総合学習

義務教育の時代にぜひ徹底させたい素敵な時間がある。

その時間は、数学の勉強より、国語の勉強より、どんなに大切な教科より、もつと楽しく、素敵で、意義のある「掃除」^{そうじ}の時間。

今の教育ではこうした素敵な時間がないがしろにされてはいらないだろうか。掃除当番をさぼり、塾に行き、テストでいい点数をあげた方が「ためになる」と、目先の計算だけで子供を行動させてしまう。

「塾の時間だから」と掃除当番をさぼることに「後ろめたさ」も感じず帰る子供達もおかしいが、それを許してしまっている環境にも根深い問題がある。

掃除当番をすることで「使ったものは片付ける」というルールを学び、皆と協力するという意味を知る。汚れたものが綺麗^{きれい}になり、気持ちよくなることが体験できる。決められた時間の中で、頭を使つて合理的にすばやく作業を終わらせる訓練にもなる。

「一人位いいだろう!」と何気なく散らかしていることが、人にどんな迷惑をかけているかを理解し、綺麗に片付いている状態が実は当たり前ではなく、母親も含めて、誰かのおかげであることに気付く。同時に、体を動かして何かをやつた後の爽快感^{そうかい}と、人が喜んでくれる充実感^{じゅうじつ}が体験できる。

こんなに色々な「教科」が実践で学べる素敵なことは、なかなかお金を出してでも体験できないし、体験させてあげられない。だから、義務教育時代の子供達にさせたい勉強は、奉仕活動の義務化より、まず掃除当番なのだ。

◆無駄の意味を取り違えている

テストには功罪両面があるが、数学でも歴史でもその根底にある意義を説明させることより、効率的な暗記だけを問題の答えに要求してしまうのは考え方だ。生徒達に「パブロフの犬」の応用編ともいべき条件反射の訓練を徹底しても、問題は人生に残らない。生きる力とはならない。これでは、それこそ「時間の無駄」である。

むしろテストとは教師のためにある。どこが上手に教えられなかつたか、どこが理解させられなかつたか、どのように教え方を工夫すればいいのかなどの反省材料として。

ちょっと想像してみて欲しい。まるで「お手^{えさ}||餌^{えさ}、餌^{えさ}||お手」の訓練と同じように見えるテスト用解答を、いかに効率的に短時間で出すかの訓練をさせられている子供の姿を。その姿を哀れに思うのは私だけではないはずだ。

頭は考えるための道具箱であるはずなのに、まったく使わない「宝の持ち腐れ^{ぐせ}」になってしまう。その方がよほど無駄に見えるのだが。

齋藤孝さんの言う「ペーパーテストでの記号操作のうまさを競うだけでは、現実社会をたくましく生き抜く力が育たないという反省」を踏まえ、無駄と省いてきたものの中に、本当は大事なものが隠されていなかつたか、確かめてみる必要がある。

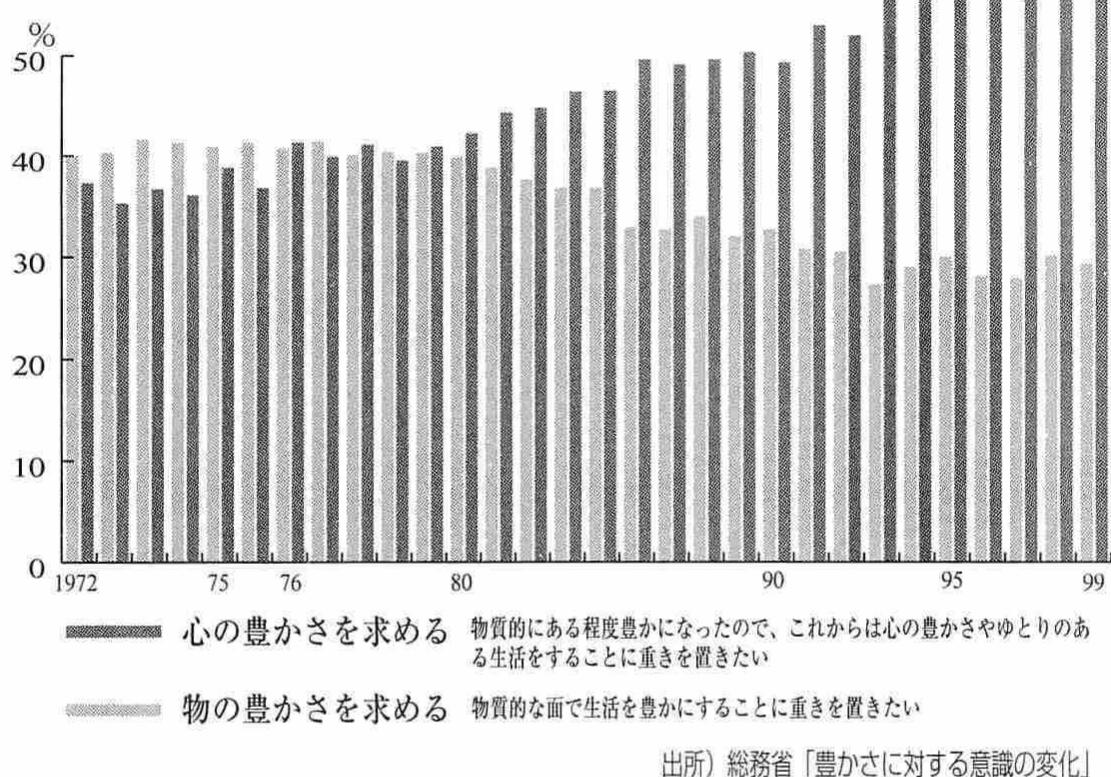
「損して得どれ！」。このように昔の人は目先の利益だけを追わず、将来大きく返つくる利益を、一見損するように見えても選択しなさいと教えたものだ。しかし、今の子供達は「無駄な時間、無駄なおしゃべり、無駄遣い^{づか}」を取り間違えて、本当の時間の使い方、お金の遣い方、人との関係などが学べる場、学びのチャンスを逃してしまつていて。

勉強以外で使う時間も有効時間だ。ゲームや漫画^{まんが}を買う以外で遣う有効なお金の遣い方もあること。友達や家族と何気ないおしゃべりや会話をすると同じように、知らない人と理解し合うために改めて対話することも有意義な時間だということ。

現代は子供が社会的に自立するまでのモラトリアム期間が長くなっていると言うが、子供達の純粹な意味での子供時代は短いのだと思う。「その歳で」と思うくらい、大人のような理屈をこね、損か得かを判断して動く。しかし、精神的に成熟していない子供達の判断基準は、結局大人のコピーバーに過ぎない。大人のコピーである判断基準が目先の基準であるために、子供達にかわいそうな結果を押し付けている。

大人の世界は「不況だ！ リストラだ！」と大変厳しい時代だ。そんな中、再就職や人

心の豊かさか、物の豊かさか



出所) 総務省「豊かさに対する意識の変化」

生の出直しを図るため、けつこうなお金を出して再就職のための養成所に通う人もいる。

そのプログラムの中に無償で街の中を掃除したり、人の家のトイレを掃除したりするカリキュラムがある。会社の新人研修^{けんしゅう}でも会社の周りを掃除する研修^{けんしゅう}が含まれていたり、そうやって鍛^{きた}え直されている大人達もいる。

時間の無駄だと信じて、子供達にサボることを許容している「掃除」を通して、大きく変わろうと努力している大人達がいることを、もつと広く社会的にもアナウンスしていくべきではないだろうか。

②章 自立するためにどう学ぶか

4 学生の生きがい？

◆生きがいがないのでフリースクールでボランティアを……

たくさんいたたく学園への問い合わせの中で、結構多いのが現役大学生からの問い合わせだ。なかでも「大学には何も生きがいがないので、フリースクールでボランティアをしたいのです」という内容が多い。

先日も偶然出会った大学生から同じような申し出があつた。

自分に生きがいがないからボランティアでもしようか、という姿勢がいいか悪いかは別にして、大学に行ついていても、何を生きがいにしていいのか、何を楽しみにしていいか分からぬと言ふ。そして、「今の大学生は、大学に楽しみがないので適当にアルバイトをして、それを女の子に遣うか、おしゃれに遣うか、まったくそれもしないでただ、黙々とアルバイトをして遣うところのない小銭^{こぜに}をため、それでせいぜい漫画を買うくらいしかないんです。だから、結構お金には困つてないんです」と説明する。

さらに、「親から仕送りをしてもらい、夢も楽しみも何もなくて、毎日ハンを押したように学校と家を往復するだけの生活。親が聞いたらどう思いますかね?」と一人言のようにつぶやく。

一番多感なときで、潔癖^{けっぴき}な年齢のはずだが、まるで疲れたサラリーマンのような生活をしている。青臭^{あおくさ}くてもいい。「人生とは?」「愛とは?」「仕事とは?」、そして「生きるとは?」といった、人生の根本を左右する疑問は湧かないのだろうか。生き方を揺るがすおざなりにできない問題だとと思うのだが。

「とにかく目に入つてくるもの、耳に入つてくるあらゆることに憤慨^{ふんがい}したり、感動したりして、友達同士で朝までディスカッションなんていうことはないの?」という私の質問に、「それって、親父の時代のようですよね」と彼は笑つて答える。

「僕は大学院の二年生です。タイが好きで、アルバイトをしてはタイに行き、そのうち、タイから周辺の国々にも行くようになり、それが高じて今では、アメリカの旅行会社の添乗員^{てんじょういん}のアルバイトを授業の合間にするようになりました。これがなかなか勉強になり、面白いんですよ。学園のお子さん達がタイ旅行をすると聞きましたが、お役に立つことがあれば、情報でも何でもさしあげますからメール下さい」

真っ黒に日焼けした肌に真っ白な歯、切れ味のいい言葉づかいに、「久しぶりで、若者らしい若者に会ったな」と嬉しくなった。こんな学生さんがいないわけではないが、本当にまれなのだ。

◆生きがいから遠く離れた子供達

どうして若々しい大学生ではなく、くたびれたサラリーマンのような大学生が多いのだろうかと、考えながら歩いていたとき、有名塾のかばんを背負った小学生が振り返って私を見上げた顔が、疲れたサラリーマンと同じ顔をしていたのには、正直びっくりした。世の中、何かがずれ、何かがいびつになっている。

受験戦争の最盛期には、大学受験日から逆算されたスケジュールの中で、自分で考える訓練をせず、テスト問題の暗記が奨励されるような極端な「詰め込み教育」が確かに存在した。業者テストによる偏差値とにらみあわせ、有無を言わさず差し出される「入学できる高校リスト」も存在した。

現在は少子化などの影響で、受験に対する熱も一時より鎮静化しているかのように見える。しかし本質は変わらず、実際は潜伏せんぱくしているだけではないだろうか。

かつて、そして未だ現在も、学生達は勉強したい学部も学科も明確にならないまま、偏

差値で選別された大学リストの中で、一番「有名そう」、一番「名が知れている」、一番「就職がしやすいだろう」という基準で選択し、学校を決めていく傾向がある。

こんな理由で決めた大学で「生きがい」を見つけたり、活き活きと学んだり、興味を持つて勉強するなど、そういういた思いが湧いて来るのは思えない。当の本人はもちろん、学校の先生も、塾の先生も親も、そのように入学を決めていく方法自体に疑問を持たずに、本当に彼らの将来を考えていると言いつ切れるのだろうか。本人にとって「大学」の持つ位置付けは、どうなっているだろうか。

こんな基準で「進学する」中で、子供達は自らの生きる意味をどこに見出していくのだろう。「就職」も同じ手順で決められる。だから、社会人になってどれだけの人が「活き活き」と仕事をしているのか、私には疑問だ。

たった一回しかない人生のあらゆることが、このように「逆転できない階層化」^{かいそうか}「納得を回避した選択」^{かいひ}によって次々に決められていく。だから自分から決してアクションを起こさずに、「こんなはずじゃなかつたわ!」「こんな人生を送る人間じやないんだ、俺は」と言つて、世の中を恨んだり、不平不満を洩らす人間が現れる。

「時代が変わった」「時代は変わりつつある」と言われれば、教育評論家が口を揃えて「好きなことを勉強させましょう」「制服、あれはいけません。子供の個性がなくなります」

などと言う。それを聞いて今度は、「そうだ、そうだ！」と何も考えずに同調する「そうだ
同調症候群」と呼べる人達が出現する。これがどうも日本の特徴のようだ。

◆「自分基準」をしつかり築こう

今日という日は今日しかない。今という時間は今しかない、という当たり前の現実。
辻棲の合わない議論をしてもいい。車が欲しいからと朝から晩までアルバイトをしてもい
い。一日中、本三昧でもいい。今という時間を今の年齢でしかできないことで楽しんで欲
しい。そして、自分の今日、自分の未来は自分で選択し、それを一生に繋げて欲しい。

子供の役割は親を踏み台にして、親の世界よりももっと大きな世界で自分の納得いく人
生を作っていくこと。親は子供の踏み台、子供のサンプルになれるよう自分の人生をしつ
かり生きる。自分達を踏み台にして、どんな世界にでもはばたけるように、家庭でしてお
くべき最低限の人間としての決まり、マナー、善惡の価値基準を教える。

二一世紀、先例のない新しい世紀、世界基準の中で生きなければならない子供達。今ま
での日本の価値基準に振り回されず、「自分基準」をしつかり持てる人間になろう。そのた
めに、あなた達を取り巻く大人達の一人として、私も頑張る！

上田学園の生徒たちが 制作したフリーペーパー 『CHAPS! きちじょうじ』

企画会議で語られたことは

「CHAPS!をやりたいと思ったのは、子供じみているかもしれないけど、日頃感じていることを言葉にして、地域紙っていう媒体を通して同年代と共感できるような感覚を持ちたかったから。食べることに死ぬほど困ることはなくて、時間がよく分からないまま過ぎていく。学校に通っている何年間っていう時間に意味を見出せないまま、差し出されたものを、なんとかこなそうとしているだけで、どっかに空虚さがあるなあと思うのだけど、世の中に目を向けようとすると、共感できるようなことが少ない。差し出されたものをこなせることは大切だけど、それだけだと寂しいから、共感できるものを作ろうと思った」



○ターゲットは16歳～25歳までの男女を含めた若者です

○街の情報収集を主な活動とし、それを記事として紹介するものです。情報に関しては店舗情報、商品情報や時事情報、その他。またマーケティングなどのためのアンケートなどの活動も行うものとします。

○無料のサービスであり、財源は広告収入に頼ることになります。（広告収入と支出に関しては予算の項を参照）

○まずは吉祥寺駅周辺（井の頭公園周辺を含む）での活動からはじめ、それを「CHAPS! きちじょうじ」として製作します。

○主なメディアは紙媒体であり、まずタウン誌として幅広く配布。またホームページを含めたインターネット環境での需要を考えて、ホームページ、またはi-MODEでの店舗紹介・検索、商品紹介も念頭において情報収集をめざします。eメールでの配信も同様です。

②章 自立するためにどう学ぶか

5 「失敗」のススメ！

◆エリート学生と心療内科

最近本当に驚かされるのは、精神科や心療内科にかかり、何らかの薬を飲んでいる方が多いこと。どうしてこんなに「心の病気」を抱えている人が多いのだろうか。

先日も、国立大学四年生だという学生が訪ねて来た。

大学生活はとても楽しく、成績も優秀で、何も問題なく四年生まで來たという。しかし、四年生になつてから急に学校に行かれなくなり、行つても落ち着かず、学校の友人や教授達と話しても疲労感ばかりつのり、今ではほとんど学校に行けないと言う。たまに行くのはスクールカウンセラーのところで、カウンセリングを受けに行くだけだそうだ。

自分がどうしてこんなふうになつたのか、原因がつかめないと言う。心療内科に通つて薬を飲んでいるとも言つていた。飲むと何となく心は落ち着いた気がするが、一日中何か身体がだるい氣がすると言う。

彼は、今風のちょっと細身のなかなか礼儀正しい、素敵な男の子だ。

突然訪ねてきた非礼を詫びながら、心が何となく傷つき始めた頃に、上田学園のホームページに出会い、それで訪ねて来たくなったのだと理由を述べた。

コーヒーより玄米茶がいいと言う彼と玄米茶を飲みながら、学校のこと、就職のこと、将来のことなど、色々な話をした。就職はまだ決まっていないと彼は言う。

「結構優秀な学生と見られているので、ゼミの教授達もクラスメート達も『お前が一番初めに就職が決まるだろうな』と言っていたんですが、情けないです」と言って、チヨツと悲しそうに下を向いた。

彼は就職するか、それとも大学院に進もうか迷っているとも話していた。また、混沌とした今の社会でどんな仕事が今後、どの位の確率で大きく伸びるのか、どんな企業を選択して就職したらいいのか分からぬとも言う。大学に入学したとき、どんな企業にでも行けるようにと、一応「経済学部」を選択したそ、うだが。

◆挫折経験なく育つと……

彼の話を聞いていて気がついた。彼は生まれて初めて「挫折をするかもしれない」という「恐怖体験」をしているのだということに。

起承転結のしつかりした話し方。礼儀正しい言葉づかい。一見何でも自分でやつてきたように見えた彼の行動は、実際、親が引いた幾つかのレールの中から選択したレールの上を、失敗しないよう、ただひたすら走つて来ただけであつたのだろう。今までのよう親の手によつてレールが引けない「社会」で、親の引いたレール以外のレールを、自分の考えや決断で引かなければならぬ現実に突然ぶつかり、頭の中が真っ白になつてゐる。

親以外からの評価を受け、自分の意志や考え方で走らなければならぬ航路。「就職活動」を通して、この現実に直面したとき、始めて経験しそうな「失敗」に恐れを感じ、手に入るはずのものが手に入らないかも知れないという現実に呆然としている。それを素直に認めたくないという思いが、心を重く圧迫しているようだ。

そして、その現実を認めることのできない彼は、自分を「擬似病気」に追い込むことで、現実から遠ざかり避難している。

親も子も病名が付くことで安心し、その中に身を委ねて、自分のことをまるで他人事のように「病氣のせい」にすることで、安心しようとしている。

学校に行かれないのであって、親は「焦ることないわよ、大学院にでも行つたら？」と勧めるそうだ。しかしそれは問題解決にはならず、単に「問題の先送り」でしかない。本人も認めたくないが、それは認識している。それで苦しんでいるようだ。

◆失敗は学びの宝庫

子供は絶対、いつかは一人歩きを始めて大人にならなければならない。骨太に社会を渡り、生き抜いていかなければならぬ。

大人になることをずっと拒否し続けることは不可能だ。それだからなおさら「失敗」を恐れるのではなく、「失敗」から学ぶことのできる人間に育てたい。そのために、小さいときから子供に「失敗」をたくさん経験させ、「失敗」からどう立ち直り、そこから何を学ぶかを、頭を通してではなく体験を通して、たいとく体得たいとくさせるべきだ。

大人になるとは、単に団体が大きい人になるのではない。生きている人の先輩になることだ。若い人達のサンプルになることだ。そのために自分の身体の中心に、人として生きていく上で必要な「考える基準」や、「判断する基準」を存在させることだ。これらがきちんと確立されれば、問題が起きても何とか道をはずさず、自分で考え、行動できるようになり、人間社会を形成する一員としての役目もにな担つていけるのだ。

大学四年生の彼は、玄米茶を美味しそうに飲み、ピーナッツやチヨコレートを美味しそうに食べ、楽しそうに色々な話をして、「なるべく精神安定剤は飲まない方がいいよ」という上田学園の子供達からのアドバイスを御土産に、「また来てもいいですか?」と言つて帰つて行つた。

その後ろ姿に学園の生徒の一人が、「信じられないな。あそこまで計算してエリートになつて、就職活動が上手くいかないだけで、あんなになつちやうんですかね。それに僕達の言葉が全然彼の中に入つていきませんでしたね。大丈夫ですかね?」と。

失敗から学んだら、それはどんな学問より素晴らしい。何故なら、失敗があるから成功の道を探る努力をし、その過程で、理屈ではなく正しい道、上達への道がつかめていくのだから。

「大学生君! 今からでも遅くないから、失敗を恐れずたくさん失敗して下さい。その失敗から色々なことを学んで、逞しく生きて行つて下さい。応援していますよ!」

我々大人も失敗を恐れず、自分達の失敗もしつかり認めて、それを土台にして次のステップにいく様を、たとえ不格好にみえても、二一世紀を生きていく子供達の先輩として見せていただきたい。

今の時代は時として、苦手なこと、不得手なこと、できないこと等に目をつむり、何ができるか、何が優れているかのみに焦点をあてて、それだけを伸ばすことをよしとしているようと思えるが、本当にそれでいいのだろうかと疑問に思うことも多い。表面的な格好良さだけを追いかけたり、コンプレックスを隠す手段として、「それは、僕には必要ありま

◎具体的に学力低下を感じる点とその要因

英語	<ul style="list-style-type: none"> 英文和訳で訳した日本語の意味を質問されることがある。 単語力、文法力が著しく低下している。 ひらがなの多用（漢字で書けない） 考えながら自分のものにする姿勢が顕著に低下。英和辞書で単語を調べてもそこにある訳語をそのまま使うことしかできない生徒が増加。
数学	<ul style="list-style-type: none"> 不自然な流れがかえって理解を難しくしている。 多くの分野で教える内容が中途半端なので、その結果、定着・応用ができない。 分数、四則計算ができない。
国語	<ul style="list-style-type: none"> 文化的・社会生活的常識と思われることが著しく欠けてきた。 選んだり、バランスをとったりすることについては上手くなつたが、現国などで深くつっこんでつめていくこと、考え続けることができない。 ・学習意欲の低下。古文・漢文などの文法事項が何度もやつても定着しない。 ・誤字、または語句の誤用が多い。 ・語彙がなさすぎて読解ができない。比喩や抽象語についていけない。
物理	<ul style="list-style-type: none"> 数学力がない。グラフ・ベクトル・三角関数等を数学とは別に改めて物理の授業で伝えなければならない。
生物	<ul style="list-style-type: none"> 学力以前に身の回りの現象に対する興味・関心・経験が減ってきていると思われる。
世界史	<ul style="list-style-type: none"> 定期試験前に用語などをただ暗記することにつとめ、その流れや意義を問わない。
生徒 気質	<ul style="list-style-type: none"> 自分から求めることができない。すべてセットになって与えられるものと考えている生徒が多くなった。 ・粘り強く考える生徒が減っているのは確かである。 ・自力で解決しようとする姿勢があまりない。 すぐにマニュアルを欲しがる。

出所) 河合塾「1999 Guideline 11月号 特集 高校生の学力問題を検証する」

せん」と言つて自分を誤魔化すのではなく、苦手なこと、できないことを素直に認め、苦手なことや失敗から楽しく学ぶことを覚えて欲しいと思う。

「やらない」といつても同じではないことを理解して欲しい。そこから初めて、本当に自分の優れているものを見つけてアピールできるようになつていくはずだ。

②章 自立するためにどう学ぶか

6 「とりあえず」はやめて！

◆「とりあえず」の進路決定、人生選択

就職活動をしているという若い人から電話やメールをいただく機会があるが、その中で気になることがいくつもある。それは「とりあえずしておく」というフレーズだ。

「就職が難しいので今年は卒業を考えずに、とりあえず大学院にでも進もうかと思っています」という大学生。

彼らは本当に大学院に行きたいわけではない。「まあとりあえず、時間つぶしに大学院に行つて、何かを勉強しながら、就職活動でもしようかな?」という程度の考え方で、大学院への「進学理由」としている。

「『とりあえず』と大学院に入つてこられたら、教授達もやりにくくて困るでしょうね」という私の言葉に、大学生達は「えっ、どうしてですか? 今大学院に行く人達はそういう理由で行く人達が多いですよ」という答えが返ってきた。

何がしたいかわからないので、とりあえず大学に入り、就職ができないからとりあえず大学院に進む。一人で住むのも不経済だし、とりあえず一緒に住んで、ここらへんでとりあえず結婚し、とりあえずこのあたりで子供を生んで、エトセトラ、エトセトラ……。

そしてこの「とりあえず」の中に、どうもフリースクールの先生になることや学校の先生になることが入っているようだ。もちろん中には、本気で子供達のことを心配し、理解しようとして、フリースクールの先生の職に身を投じようという方もいるのだが。

◆「とりあえず」でやつてはいけない仕事

お金を稼ぐことは簡単ではないし、楽しいことより、むしろ苦しいことの方が多い。おまけに、自分のした仕事の結果を見ることは意外やあまりない。ひどい場合は、自分の仕事が何のためにあるのか確認できないケースすらあるのではないか。それが一般的に言われている仕事の現実だ。

教師という仕事は、他の仕事に劣らず大変だが、それに勝るだけの楽しみもある。それは子供達が成長していく様子や、変化していく様子が自分の目で確かめられること。子供達の可能性を伸ばしてあげられること。それと同時に教師自身も成長させられることだ。

教師のどんな苦労も子供達のひと言、うれしそうな顔、元気な様子で、全部きれいに吹

き飛んでしまう。そして「教師をやつていてよかつた！」と心から自分に微笑んでしまう。つらいときでも「やっぱり頑張らなくちゃ」とつぶやいてしまうほど、子供達の成長が教員にとっての「活力の源^{みやざと}」となる。こんな素晴らしい仕事に「とりあえずやってみようか」の感覚で取り組んで欲しくはない。

世の中には、「とりあえず」で選択していくものと、してはいけないものとがあると思う。人の命にかかる医師や、人の人生を左右する裁判官など、こうした仕事は「とりあえず」といって選択してもらっては困る職業だ。そして、先生の仕事もこの中に入るはずだ。

◆フリースクールとひとくちに言つても……

特にフリースクールの先生になりたいという人とお話すると「困っている子供達の面倒をみてあげたいんです」と皆が一様に口にする。しかし「面倒をみてあげる」のニュアンスが、「一緒に遊んであげる」のニュアンスなのだ。遊んであげるのニュアンスが、「時間を一緒につぶしてあげる」のニュアンスなのだ。お金のために就職するのでもないし、それでは「とりあえず今流行のフリースクールの先生にでもなろうかな?」という、思いつきのボランティア感覚が感じられる。

学校の先生も、フリースクールの先生も、そうそう簡単な仕事ではない。特に現在不登

校児の増加が大きな社会的問題となつていて、こうした不登校児が在籍するフリースクールの仕事はそんなに甘いものではない。そういう感覚で捉えていたとしたら、それは「美しき誤解」だ。

今のフリースクールには三つのタイプがあると考えられる。もちろん②と③の機能を併せ持つというように、だんりょくせい彈力性のあるところもある。

①通信高校で高卒資格をとつたり、大検受験をする学力をつけるための「サポート校」
②家に閉じこもつて人と接触しないのでは精神衛生上良くないので、人と接触できる場所を提供する「フリースペース」的なフリースクール

③自分のための勉強をしよう、自分の可能性を見つけてみよう、という自分作りを主眼としたフリースクール

これは、学校に行きたがらない子供達の理由が大きく三つに分かれてきたことにもよるのだろう。

- ①何かしらの理由で勉強についていけなくなり、学校が面白くなくなつたグループ
- ②人間関係のつまずき、トラブルで行かれなくなつたグループ
- ③学校でこんな勉強をしていて大丈夫だろうか。詰め込み式でまったく自分の頭で考えさ

せてくれない学校で勉強する理由があるのだろうか。もつと自分の知りたい勉強がしたい、と疑問を感じて学校に行くことを拒否したグループ

◆フリー・スクールの先生はボランティア感覚では勤まらない

確かに、タイプによつてはボランティアや助成金で成り立つてゐるフリー・スクールもあるが、基本的には、それだけではやつていけなくなると思う。

経済的な面ではボランティアの方々が入つてくださることは大助かりなのだが、子供達は毎日成長をし続けていく。その子供達に**対処**していく大人達には、体力、気力、知力が求められる。もちろんそれだけの労力もいる。それに対し**相応**のペイを受けとらなければ割に合わない。

子供達は自分達と付き合つてくれる大人達が本気かどうかをしつかり見抜こうとする。ある意味、戦いの場と言つてもいい。結局、ボランティア感覚では気持ちの上で責任が育たないから教師はなかなか勤まらない。

いろんな理由で学校に行かれなくなつた子供達に、「とりあえず、面白そだから家を出てそこへ行つてみたら?」と言つことはある。でも、その子供達を受け入れる先生や関係者が「とりあえず、そこで働いている人達」であつたなら、そこは「本物」の場所ではな

いし、働いている人達も楽しめていないだろう。

行くときは楽しくなくても、そこへ行つたら、その人達が楽しそうにしているので思わず楽しんで、また「行きくなつた」という効果が起こらないと、その場所の「存在意味」は発生しないと思う。

フリースクールの意味は大変重い。何しろ、子供達の将来がかかつていてるから。

いくら「お役に立ちたいのですが」と思つてもらつても、一度関わると、そうそう逃げられないし、条件が悪くなつても続けてもらわなくてはならない。それを、安易に「とりあえずボランティアで」と言つて始める。その結果「こんなに大変なのが分かつていたらボランティアはしなかつたと思います」と言われても、言われた学校も困るだろう。

また、そう言つて辞めていく先生の後ろ姿を見る子供達も悲しむだろう。だから「とりあえず」教師になるのは、真剣に取り組めるようになるまでやめていただきたいのだ。

年月が過ぎれば子供は大人に、子供を持てば親に、誰もがなる。しかし、自分の分をわきまえて、しつかり自分の責任を果たせる大人や親や教師になるのは、思つてはいる以上に難しい。人を育てる前に自分が育たなければならぬ。まずは自分自身を見つめ、その後に子供達のお手本になるためには何が必要なのか、合わせて見つめて欲しい。

7 一番美味しい時

◆余韻^{よいん}を楽しめる人生を送っていますか？

「先生ゴメンナサイ。こんなこと言つてスミマセン。でも、どうして日本人は五分間を樂しませんか。一番美味しいところでバタバタします。それが嫌いです」

日本人への皮肉のつもりだろう。ゴメンナサイとスミマセンを連呼しながらオランダ人の学生が話し出す。

例えばいい音楽を聴いたときの醍醐味^{だいごみ}は、演奏^{えんそう}が終わった後に流れる余韻。その余韻に酔^よいしているときが至極^{しごく}のひとときではないだろうか。そのひとときが欲しくていい音楽を聴きに出かける。いくら日本のチケット代が高くて生の音楽を聴きたいと願う。

でも、一番美味しいところをまったく樂しまない日本人が多いと言う。たつた五分間の余裕。たつた五分間で味わえる至極^{しごく}の時間。そのたつた五分で味わえる楽しみをどうして日本人は楽しまないものかと、そのオランダ人の学生は言う。

日本では一九五〇年代あたりから、大学受験に子供の人生の照準しょうじゅんが合わされ、効率的な勉強方法を求め、知識重視、管理強化の傾向に流れ始めた。六一年には全国学力一斉テストが導入され、七四年には高校進学率が九四%を突破した。センター試験の前身である共通一次試験がスタートしたのは七九年のこと。しかし、七〇年代から始まつた「詰め込み」教育批判と同時に「ゆとり」教育が時代の趨勢すうせいとなり、授業時間数は減っていく。その中で台頭してきたのが塾だ。

社会的成功へと通じる一本しかないレールの上を失敗しないように注意深く走り続け、あらゆることを結果から逆算し、無駄はぶを省いて行動する。

確かに長い人生の中では、そういうことをしなければならない時もあるだろう。しかし、人生のすべてがそうだと考え、行動するのは明らかにおかしい。端から見ていても苦しそうだ。とても楽しそうには見えない。真似まねしようと思えるほど素敵な生き方にも見えない。ただただ自分をがんじがらめにし、何の余韻よいんもないまるで「機械」のような生活をしているように思える。

五分間の狂いもないように計算された人生が、本当に計算通りになつているのかどうか
といふとかなり疑わしい。

人生の長さは人によつて違う。しかも、誰も自分の人生の長さは分からぬ。分からぬということは、計算通りの人生を送ろうと思つても、本当は計算できないのだ。時には計算ばかりせず、人生の計算を無駄なあがきと放り出してみてもいい。「五分間の余裕」もとれない人生を過ごすのはどうしても幸せには思えないから。

果たして、時代が変化していることにすら気付けない大人が素敵に見えるだろうか。余韻を楽しめる身の丈たけに合つたゆつたりした人間らしい生の送り方が分からぬ大人に果たして子供は憧れるだろうか。

これからの中学生には、自分の周りをきちんと眺められる余裕を持ちながら、骨太に自分一人で食べていける力を身につけて欲しい。そして、大人になったとき、ひとときの余韻を楽しめるようになつてもらいたい。

◆大人は五分間の余裕を楽しもう

長い間、私達大人は子供達に、成功への方程式から逆算し、それに沿つて行動するプログラムを義務のように押し付けてきたのかもしれない。

そして、そうしたプログラムを窮屈きゅうくつに感じたり、何かが間違つてているという危機感を持つた子供達が起こしたのが「不登校」というより、むしろ積極的意志として選び取った

「登校拒否^{とうこうきょひ}」だ。

こういった子供達の勘^{かん}の良さには驚かされる。親の引いたレールを、ただひた走りに走つてゐるから「失敗しない」などという保証は期待できないことも、学校生活を上手にやつてゐるから「頭がいい」ことではないことも、どこかで嗅^かぎ分けている。

しかし、「頭でっかち」なのに、心は「ありさんの心」のように小さい今の子供達。だから、計算外の出来事を極端^{きよくたん}に怖がり、分からない、計算できないことにぶつかつていきたがらなくなつてゐる。予想外の五分間の出現に戸惑い、混乱してしまう。

頭の中にいっぱい未経験の情報を詰め込み、どんな人生が歩みたいのか分からなくなつてゐる子供達。彼らに向けて「苦しまなくともいいよ」と伝えられるのは、計算外の五分間を楽しめる大人だけではないだろうか。

人生はたつた一回だ。びつちり隙間なく計算されたスケジュールに振り回される人生ではなく、五分間の余裕を楽しみ、心がゆつたりできる中で過ごさなくてはもつたいない。

ふつとした何気ない^{なにげ}ことから湧き出るような計算外の出来事の「余韻」を、じっくり楽しめる人生を歩んで欲しい。いい音楽を聴いた後のふわっと心に広がっていく、あの至極のひとときのような余韻をじっくり味わつて欲しいと思う。

8 自分作りをせずに自分探しができる？

◆日々是発見

「まあ、お元気ですね。いつもニコニコしていて、パワーがありますね」と言われる元気印の私も、毎日毎日が悩みの連続だ。眠れない日は、母の「死んだらゆつくり眠れるから、眠れなくても何ていうことはないわよ！」という口癖を心の中で繰り返しながら、本を読んだり、悩んだりする。すると今度は、テレビで拝聴した瀬戸内寂聴さんの言葉が聞こえてくる。「悩むことなけれ」と。

「悩みのないのが悩みなのよ」と公言(こうげん)していた頃が嘘のようだ。「ああ、彼のよさが一番輝くように育てるためには、どんな指導がいいかな？」など日々悩みは尽きない。

この他にも「あの子の長所を生かしながら、無視していい問題と、解決していかなければならぬ問題をどう理解させようか」と頭を抱えたり、「経営者として、もう少し厳しくしないといけないかな」と悩んだりしている。

こうした悩みの毎日だが、私には幸運なことに、色々なことを気付かせ、発見させてくれるたくさん的人がいる。私の周りにいる日本語の先生達や外国人学生、そして生徒達だ。私は子供達に自分らしく、自分にあつた人生を歩んで欲しいと願っている。人生を終えるときに「俺は一生懸命生きたぜ。満足だつたぜ！」と心底から言える納得した人生を歩んで欲しいと願っている。そのために自分らしく生きるためにはどうしたらいいか「自分探しをしよう」と言っていた。

しかし先日、学園の先生と話していくて気付かされた。自分探しをすることも大事だけれど、今は「自分作り」をさせることが大事なのではないか、ということに。

◆まず「自分作り」からはじまる

私はずっと「自分探しをしましよう！」と言ってきた。しかし、「自分探し」という言葉には二つの意味があることに気が付いた。

まず自分がどんな人間で、どう生きていくべきかを考えることを「自分探し」というのであれば、自分とじっくり「対話」しなければならないだろう。しかし自分とじっくり対話して、自分を探すのは大変なことだ。それには、対話する内容のたくさんつまつた自分がいなければ、対話できない。自分の中にもう一人が「自分探し」をしても、そ

れは見つかるはずがない。

またもうひとつ意味の「自分探し」とは、人としてこの世に生かされている意味、つまり、自分に与えられた社会での役目を見つけることだ。いろんな人との関係の中で、「いるべき自分のポジションを探す」意味がある。どこか知らないところに本当の自分を見つけるべく行くのではなく、しっかりと他者と向き合い関わり、現実の世界に足場を築いていく。

これは頭の中で探すのではなく、行動することで手応えを得るのではないだろうか。特にバーチャル世界だけで生きる傾向のある現代っ子達。間違えることを「恥」と考えがちな現代っ子達が、頭の中で考えて「できない、駄目だ！」と結論を出さないように、頭の中のシミュレーションだけでは計算できない予想外の出来事を、自分の中に取り入れていく訓練が大事なのだ。

自分で作りをしながら、実際に動いて、傷ついて、「これでいいのかな、あれでいいのかな」と自分にふさわしい足場を見つけて欲しい。そこで自分をしっかりと築いて欲しい。そして世界で自分が一番生き生きできる「自分のポジション」を見つけて欲しいと思う。

「自分探し」という快い言葉に酔つて、考える振りをして逃げないで欲しい。逃げながら、口だけは開けて、自分が「美味しい」と思うものだけを食べていると、彼ら自身が骨太に世間を渡り、生きていく力を弱めることになる。

◆夢に出会える人になろう

私は夢を自分の手で実現するための「道具の使い方を学ぶ場所」として、この学園を位置づけている。「夢の手作り工房」^{こうぼう}として機能することを考えている。そして、今は自分の人生を自分の手で作っていけるように、時間をかけてでも見守り、子供達に努力していくよう指導している。

手作りの自分の人生なら、それは必ず納得のいく人生になるはずだ。しつかり自分の手で自分を作る努力をしているうちに、夢を持っている人、いない人に関わりなく、「夢」に出会えるのだと思う。

しかし、私は学生に対し時として「鬼」になる。それは学生自身が独り善がりに陥ったときだ。どんなに厳しくとも、なるべく客観的に見た感想を、率直に学生達にぶつける。例えば「自分探しをしています」といつて怠けよう^{なまけ}としたり、自分自身を煙にまいて問題の先送りをしようとすると、私は「鬼」になる。今という時期を逃がすがすと本当に駄目になつてしまふと思うから。

他の誰かと比較しなくていい。オンラインになつたらいい。誰かの思惑通りにならなくていい。まず自分としつかり対話して欲しい。そして永遠の自分探しを続けるのではなく、今はしつかり自分作りをして欲しいと思う。

9 現代の若者

◆育つてゐる素敵な若者

一、二年前から「現代の若者をどう思いますか?」という類の質問をよく受けるようになつた。その度に、「ああ、こんな質問を受けるほど他所様から見ると、私は歳をとつたのか」と、内心ガッカリしていたのだが、最近になつてようやく気がついた。これは、年齢の問題ではなく、どうもフリースクールをやつていることから来る質問なのではないかと。「現代の若者をどう思いますか」という質問をされる度に、「今の若い人と話をすると、知つているはずの日本語が宇宙語のように感じるし、モラルなどという言葉は旧石器時代から存在しなかつたように感じる」と少し可笑しみも込めて答えていた。外見も大きく変わつた。女子の背丈は急に伸び、百七〇センチ以上もざらである。頭は金髪、爪は真っ黒なマニキュア。足も長く、後ろ姿からでは男女の区別もできない。その上、学園で私が関わっている若者は、明るい不登校に暢氣^{のんき}なパラサイト。

「現代の若者のことどう思いますか」と聞かれて、結局一括りにした感想は述べられない。だからと言つて、彼らを認めていないかといえば、それも一概には言えない。私達の若いときも、散々大人達に言われた。「今の若者は、まったく理解に苦しむ」と。

今も昔も、素敵な若者がいれば、嫌な若者もいる。ただ歳のせいか、若い人を厳しい目で見るようになつたのは事実だ。しかし、その事実を差し引いても、すべての若者に満点はあげられない。一番気になるのは、「本当の君は、違うよね?」と聞きたくなるような、偽者の自分を演じている若者が増えていくように思うことだ。それだけに、自然体の素敵な若者に会うととてもうれしくなる。

先日、ニューヨークで活躍する二十五歳の若者が学校に訪ねて来てくれた。彼は慶應大学を三ヶ月で中退し、リュック一つで海外を放浪^{ほうろう}。その後、旅先でいろんな人の出会いがあり、現在は、フランス人の教授と一緒に彼のアイディアで特許をとり、アメリカ人の投資家に投資をしてもらい、会社の社長をしていると言う。

国籍を問わなければ、このような話は結構海外では聞く話だ。ただ、彼のすごいところは、インド人の技師達にインドで会社を作らせて、インドの発展のために技術者を育て、一人立ちできるようになることを考えていることだ。

極端な話、インドでは大学に行く年齢層が二〇〇〇万人居て、そのうち大学に行けるの

は二〇〇〇人。そのうちの二〇〇人が工科大学に入学でき、そのうちの二〇名がコンピュータ関係の学部に入れるそうだ。

それだけに、優秀なIT関係の技術者は世界的に高く評価されている。彼らは重宝がられ、世界の技術先進国に引き抜かれていく。だからなかなか地場産業としてIT関係の企業が育たない。これがインドの実状だそうだ。しかし、彼が手を組んだ優秀なエリート集団は、「インドで会社をつくり、インドのために、インドの人達を育てたい」という彼の願いに共感し、それを応援する組織作りに参加したのだと言う。

確かに、発展途上国に様々な日系企業が進出した。現地で一生懸命、順応し、活躍している。しかしその中のいくつの企業が、その国を育てようと真剣に考えて、組織作りをしているだろうか。二五歳の彼は、それを当然のこととしてやっている。
彼は言う。

「前に進むと考へると、知らない未知の国に行くみたいで不安になるけれど、『自分の居るべき本来の場所に帰る』と考えると自然なので、気が楽になるのではないでしようか」

◆若い人の可能性は大人の物差しでは計れない

私は学園の学生に、「そんな小さいことにクヨクヨするより、世界を相手に生きたら」と

いつも話している。しかし、ニューヨークから来た彼にこんな言葉は必要ないだろう。いつも自然に地球を相手に生きている。

地球を相手に楽しんで仕事をし、活躍している彼の話に思わず、「お話、ありがとうございます」と最敬礼^{さいけいれい}。そして、「なんて面白い若者が育つてているのだろうか」と感嘆した。こんな若者がいるかぎり、「現代の若者をどう思いますか」という質問に、ネガティブな意見は答えとして似合わない。

若い人の可能性は、大人の物差しでは計れない。また計れるつもりになつてはいけない。どんな子供にも可能性があり、大きな未来がある。この事実を改めて認識しないと、それを育てる土壌^{どじょう}作りをするより、むしろ無意識に潰^{つぶ}してしまいかねない。この学園は小さな学校だが、子供達が持つていてる可能性や未来につながる力を培う土壌の一部でありたい。そうやって存在できたら、どんなにうれしいかと思う。

次回帰国したら、学園で子供達に色々な話をしてくれると言う。どんな話が彼の言葉で語られるのか、今から皆で楽しみにしている。

こんな素敵な若者に会える子供達は幸せだと思う。そして私もまた、この素敵な若者から色々なことを学ばせてもらえることに、心から感謝している。

10 子供達の節目、学校の節目

◆突然訪れる生徒の変化

学園は二年間の学校だ。三年目を希望する場合は、学園に在籍ざいせきするための条件が出される。その条件は、生徒によつて変えるようにしている。なぜなら、一年在籍を延長するには、生徒側にそれを希望するだけの理由があるはずだからだ。そこで、その理由を聞いた上で、学園側も条件を出す。

不思議なことに、どの学生にも一年の中で大きく変化する時期がやつてくる。学園に入った学生達が、毎日変化、成長していく中で、それがいかに小さな変化、中位の変化であつたかに気付かされるほどの、大きな変化を遂げる節目が訪れる。

今年もそんな節目を迎えた生徒がいる。

ここ何週間かの彼の目にあまる行動に、私は爆発した。そして、「私はあなたを逃がさないから！」と徹底的に話しあつた。そして、話し合っている間中、「本当に善い奴だ。本当

にかわいい奴だ。でも、誰も本当のことを告げず可哀相な奴だ」という思いが、私の心の中を駆け巡っていた。

「ほんとのことを言うのは、いちばん簡単ことなのに、それができなくなっているからことばがどんどん腐つて死んでいく」

吉本隆明氏が言つていたことをふと思い出した。

私は、人は誰でも何らかのハンディキャップ、すなわち「不利な条件」があるのが当たり前と考えている。しかし年齢、性別、学歴等に全く関係なく、どんな条件の人達とも、一人の人間として「対等」に付き合うべきだと考えている。

それだけに、子供達を「可哀相」などと思つて決して付き合いたくない。私のアドバイスを聞くか聞かないかは彼らの選択。でも対等に付き合うのであれば、「おかしい」と思うことは、絶対納得するまで話したいと思う。

彼は一年目の節目を無事超えようとしている。何も知らない先生達から「どうしたんだ？」すごくスッキリした感じがするけど、何かあったのか？」と質問されている。

「先生、明日の夜お時間がありますか。申し訳ないんですが明日、時間があつたら、話したいことがあるんですが」

電話の向こうから節目を無事超え、そんな生徒の明るい声が聞こえてきた。久しぶりで何かが吹っ切れたような明るい声。その声を聞いたとたん、うれしさと愛おしさがあふれ出し、電話の向こうの生徒をぎゅっと抱きしめたくなるほど、ジワジワと心の底から湧きあがってくる幸福な気持ちを感じていた。そして思わず、「だから、どんなことがあってもギブアップしたくないのよね、この仕事」と呟いていた。

◆子供達の意欲にスイッチが入る

「人にお願いをするのに遅れて来るとはどういうこと？」

三分遅れでやつて来た学生に野原先生の厳しい言葉が飛ぶ。その言葉をきちんと受けて謝罪する生徒。そこには、これから何か新しいことが起こりそうな何ともいえない心地よい雰囲気が漂っていた。

「先生、これだけの初期投資をして下さい」

野原先生の授業で行う「野原組」の仕事についての試算表を提示しながら、学生達が説明を始める。学生達は彼らの目から見た吉祥寺という街を、『C H A P S！ きちじょうじ』というフリーペーパーのタウン誌にしてみたいと言う。どのように取材し、どのように営業し、どのような紙面にするかという企画会議をしたと言う。すでに、印刷屋さんを招い

て、紙や印刷についての講義もしてもらっていた。

今学期の野原先生の授業内容についての企画会議があると聞いていたので、多分その企画会議で話し合ったことが「はずんだ声」の一因だらうと察はついた。だから、あの何とも希望に満ちた声を聞いたとき、「少しくらいの難問は、頑張つて聞いてあげよう！」と心に決めていた。

いくつか疑問に思うことを質問し、その答えを載^のせた企画書の再提出を要求した。そしてその要求に対し、「火曜日にはメールで提出致^{ていしゆつ}します」と返事する彼らが、チョット大人になつたように感じた。

学園で学ぶ学生達には、常に風通しを良くするよう心がけ、社会から学ぶ機会をあげてきた。できるだけ社会から「隔離^{かくり}」しないよう心がけ、学生自身が納得したならば、外からの取材でも、見学でも大歓迎^{かんげい}でお迎えした。

「大丈夫ですかね。仕事の経験がないのにいいんですかね」と心細氣に訴^{うつた}える学生に言う。「いいじゃないの。やつて失敗してみれば。その経験はどんな経験にも勝ると思うよ」私はいつも学生達に言つている。

「先生から教えてもらうのではなく、先生の持つていてる知識・知恵・経験・体験、何でもとつていきなさい。そのために、ただ口を開けているのではなく、あなた達から先生に勧

きかけなさい。アプローチしなさい。方法が分からなくてもいいから、やつてみなさい。やつているうちに、理屈でなく、どうやつたら人の心が開くか体験できるから。それが上手にできる人が、自分のやりたいことをやつている人に多いのではないかしら?」

学園はまだまだ小さな学校だ。でも、三人の在校生の中に既に小さな社会ができ、お互
いが良い影響を与え合つて、グングン力をつけていきそうな勢いが感じ取れる。

新学期が始まり、まだバタバタしていたところに、早稲田大学を中退した後、授業料も生活費もコンピュータで稼ぎながら入学した息子を心配した彼のお母さんがやつってきた。「学園の先生方の目がキラキラ輝いていて、眩^{まぶし}しくて見ていられなかつた」という感想を述べ、一泊した彼のアパートで美味^{おいし}そうにビールを飲んで帰つて行つたそうだ。また、ある学生のお母さんは、「一ヶ月もたたないうちに、子供の時のような良い顔になり、主人と『ミラクル!』と話しております。本当に反省しております」と話して下さつた。

学生の一人ひとりは本当に素敵で、可能性を沢山持つた子供達だ。それだけに、彼らをとりまく私達は、しつかり自分の生き方を追求していかなければと思つてゐる。
子供達、頑張れ!。

私達も負けずに頑張るから。そして一緒に学び、役に立つ学校をつくろうね。自分の人
生を自分に^{ほこ}誇れるようになるために。

○上田学園の時間割と授業

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	単発授業
10：00						石束	
10：30	基礎授業	基礎授業	基礎授業	基礎授業	基礎授業		
11：00							
11：30							
12：00							
12：30							
13：00	上山	上田	神崎	藤本	伊藤	野原	
13：30							
14：00							
14：30							
15：00	曾禰	見上	高橋	麻生			
15：30							
16：00							
16：30							
17：00	ソーバー		川戸				
以降							

基礎授業 「読み書き計算」 各人が不得意とする基礎部分を発見し、重点的に強化します。

上山 ディベート ディベートを通して、人と話をする時の話の組み立て方を学びます。

曾禰 マーケティング 自分がお店を持つならどこに、どのようなお店をもつか。商品開発まで学びながら客観的に物を見ることを学びます。

上田 日本語の教え方 外国人に日本語を教えながら、国語や日本文化を確認します。

見上 音楽・哲学 「星の王子様」をイタリア語、ロシア語、フランス語、英語、スペイン語、ドイツ語で読解などをやります。

神崎 気功 人前であがらずに喋れるように練習したり、人と人の間の距離のとり方を考える。健康になるための呼吸方法などを身に付けます。

高橋 昆虫学 昆虫とその周りの世界を楽しむ。年齢・学歴に関係なく学ぶ姿勢を学びます。

川戸 水泳 マイペースで身体を鍛えよう。心身を健康にします。

ソーバー タイ語 日常会話、文字練習。タイ人の考え方を子供の絵本を使用しながら学びます。

麻生 話し方・コミュニケーション 声優の経験を活かし、色々な表現の仕方をプロの人から盗んじゃいます。

伊藤 企画 旅行会社勤務の経験を活かし、買い付けの企画を立て、営業から最後の買い付けの添乗アシスタントまでをやります。

石束 ビジネス研修 足元にいっぱい仕事の情報があり、それを生かすも殺すもその人次第であることを学びます。

野原 タウン誌作り・企画書の作成 取材しながら社会と会話すること、伝えるための文章力、人を動かす指導力などを養っていきます。

藤本 株の取引(投資教育) を通してし金融のしくみ、自己責任の原則を学びます。

二児の母から上田先生への手紙 2

これは先生に相談です。来年の4月子供が小学校に入学の予定で、私の住んでいる地区は小学校の選択性を導入しています。我が家から通える範囲では二つの学校の選択肢があり、その選択に迷っています。一つの学校は、公立ですが進学校でほぼ90%の子どもが中学受験をします。形式的には本来は区域外で、越境入学になりますが家からは7分ぐらいと最も近い学校です。もう一つは、いわゆる地元の学校。進学率でいえば1クラスそれでも4、5人は受験をするそうですが、基本的にはのんびりとした学校です。(でも小学校選択性になり、公立とはいえた隣校との競争があるので先生方は大変そうですが)

ゆとり教育という名のもとに行われる教育内容の3割削減で学力が低下するのではないかという心配と、ゆっくりのんびりと子どもらしくというのと、何か究極の選択のような気がしています。子供自身は保育園の多くの友達が行く地元の学校を希望しています。基本的に子供の希望を重視しようと思っていますが、先生に何かアドバイスをいただければと思います。

親御さんとしてお子さんにどんな人になってもらいたいですか。どんな社会で生きていてもらいたいですか。お子さんのご性格は、どんな性格ですか。のんびり型、それとも競争好きですか。子供がまだ小さいときは、子供に好き嫌いはあっても、本当に有利な選択をする基準は自分の中にできています。親が説得するしかない場合もあると思います。そのとき、日頃からご自分は親として子供にどんな人生を歩んで欲しいか、よく考えておき、子供に伝えていくことだと思います。

私が親なら、やっぱり悪い評判がないかぎり、家に近いところを選びます。学校の一番の勉強は大勢の人の中で、どう人と関わっていくかを学ぶことだと思っています。また、小さいときから、時間に遅れない。宿題をちゃんとする。忘れ物をしない等をしつけたいし、時々友達とどうやって帰ってくるのかを見たいので、家に近い方が親に便利だからです。それ以上に子供にとって、近所に友達がいることがとても大切です。遠くの学校に行くのもいいですが、友達との交流が家に帰ってからなくなってしまいます。携帯で話することは、私が親ならさせません。

それと、基礎学力（国語力と算数）がきちんとついていくか、そのところに注意を払えば、あまり学力低下の問題はご心配いらないと思います。毎日の生活の中で、本を読む楽しみや、何にでも疑問を持つことを教えてあげる。親御さんが沢山本を読み、楽しんでいるところを見せたり、道を歩いていても何にでも興味や疑問を持ったりすることを見せてることで、子供が何にでも興味が持てるようになっていきます。